

景観法からのまちづくり ――関市東山町を対象として―

岩手大学 フェロー 安藤 昭
 岩手大学大学院 学生員 ○田村 麻帆
 岩手大学 正会員 赤谷 隆一
 岩手大学 学生員 金田一 毅
 岩手大学 正会員 南 正昭

1. はじめに

機能主義的な成長型社会から持続可能な成熟型社会への歴史的転換期である今、地球環境保全、機能性、文化性、美しさなど、あらゆる視点を統合した都市デザインが望まれている。良好な景観の形成は国政の最重要課題であるが、平成 17 年度には日本で初の景観に関する法律となる景観法が施行され、強制力を伴う法的規制を適用することが可能となってきた。

筆者らは、『解釈モデル』1)及び『都市デザインモデル』2)から都市をデザインし、その実現化手法として景観法を適用するまでの手順を構築した。本研究は、この構築した手順に沿ってケーススタディを行うことを目的としている。対象地域は、多くの自然や歴史・文化的資源を有する一関市東山町とした。研究の流れを図-1 に示す。また、前途の解釈モデル及びデザインモデルを図-2、図-3 に示す。まず、東山町の実体や課題を明らかにするために、解釈モデルの4つの視角について分析を行い、抽出された課題から東山町が今後目指すべき方向性、理念を確立する。次に、その理念を基にデザインモデルに沿って今後東山町があるべき姿をデザインする。最後に、それらを実現化するに当たって、どの様に景観法の活用メニューを適応していくかを検討していく。

2. 解釈モデルによる4つの視角からの分析結果

解釈モデルの4つの視角について東山町を分析した結果、明らかとなった現状と課題を表-1 に示す。

3. 課題の整理及び理念の確立

4つの視角から分析を行なった東山町の課題から、東山町の都市デザインが目指すべき方向性を以下の6つとした。

表-1 解釈モデルの4つの視角から明らかとなった東山町の現状と課題

	現状	課題
生物的環境	地形・地質：丘陵起伏が多く、平坦地が少ない。砂鉄川やその支流に市街地が形成されている。石灰岩が無尽蔵にあり、石灰関連企業が立地。一斜面の切り崩しが目立つ	斜面の切り崩しの抑制、開発と保全の調和を図る。
	河川環境：森林保水力の低下、生活様式の変化、工業用水の確保に伴う河川の水面低下や水質悪化	清流環境の保全と再生
インフラ機能	生物：水資源に恵まれ、アユやウグイなどが生息→視察用の観光用に放流したコイが大量繁殖し、生態系の破壊が心配される。	生態系の保全
	市街地及びその他集落：河川や幹線道路に沿う平坦地、山間地に散在している。	計画的な土地利用、スプロール化を抑制し、持続可能な社会の都市像としてコンパクトシティを目指す。
	交通幹線：市街地に集中	
	土地利用：河川沿いに工業などの土地利用が多くみられる市街地近傍に住宅が立地。一扇形発展型の都市発展パターン	
文化的現象	道路網：中心市街地は格子状郊外部：中心市街地からの放射線状となっている→合成型の道路網パターン	低成長経済の動向の中で、地場産業の付加価値重視の生産と新たな需要創造を図る
	地場産業：農林業、鉱工業（石灰関連）	
心理現象	歴史資源、文化資源、人文資源、産業資源、伝統工芸技術	資源の保全、継承や周知の取り組みに努め、景観として顕在化していく。
	言語記述によるイメージ調査再の成率6.25%以下の再生要素→対象者独自のイメージに関わる要素として抽出。	東山町の文化や歴史に重点を置いた内容の行事
	現在の東山町は、「唐梅館総合公園」「各地の公民館」の他に個人が楽しめる場、自己表現出来る場があまり見られない。	昔ながらの風習を今に継承する事により、町の中での人々のきずなや、町の賑わいを取り戻す。
	個人がプライベートな空間として思い出や感情を深められる場所が少ない。	町民にとって馴染みのある、東山町ならではの自然環境や歴史文化を活かしたまちづくりを行なう。
		美術館や博物館などの芸術的感覚を養う施設の設置
		自己表現が出来る多目的なスペースの設置
		休憩所、ポケットパークなどのプライベートな空間の設置

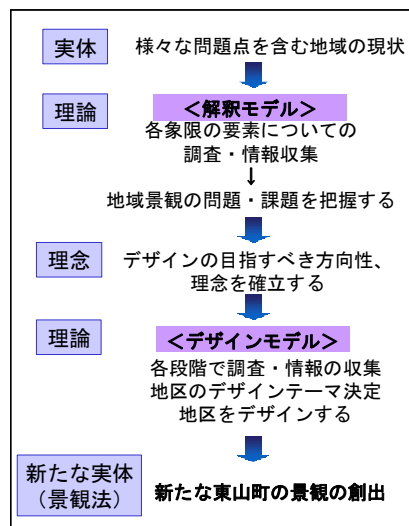


図-1 都市デザインの手順



図-2 解釈モデル

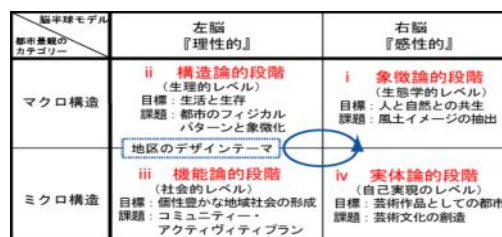


図-3 デザインモデル

- 〈方向性①〉環境重視、持続可能な仕組みづくり
 - 〈方向性②〉自然の保全、再生、創出
 - 〈方向性③〉消費者、生産者の視点
 - 〈方向性④〉身の丈にあった集約型
 - 〈方向性⑤〉多様性・個性化
 - 〈方向性⑥〉人と人とのきずな、結びつき
- これらの方向性から、東山町の基本理念を決定する。
 〈基本理念〉成熟社会の都市デザイン

5.デザインモデルによる東山町のデザイン

次に、東山町をデザインモデルにおける象徴論的段階、構造論的段階、機能論的段階、実体論的段階の4つの段階からデザインをしていく。

5-1.象徴論的段階

この段階では、地域の特性とここで生活している人々の内面を把握するため都市環境の風土イメージを採取する。イメージの採取は、言語記述によるイメージ調査とマップ法によるイメージ調査の2つの方法で行なった。それぞれの結果は地図上へプロットする。プロットし、重ねあわせたものを図-4に示す。その他、良好ストック図、問題図を作成し、それらを総合して得られた東山町の風土イメージは、以下のものである。

- ・砂鉄川がおりなす自然空間
- ・唐梅館、東稲山をはじめとした山並みの眺望
- ・自然、観光資源としての狛鼻溪、幽玄洞
- ・東山町の発展に貢献した宮沢賢治
- ・歴史的・文化的資源である菅公夫人の墓や磐井清水若水送り
- ・街の賑わいの拠点である長坂・松川中心部
- ・地場産業、歴史的意味を持つ石灰採掘場及び工場地帯
- ・人々の憩いの拠点、唐梅館総合公園

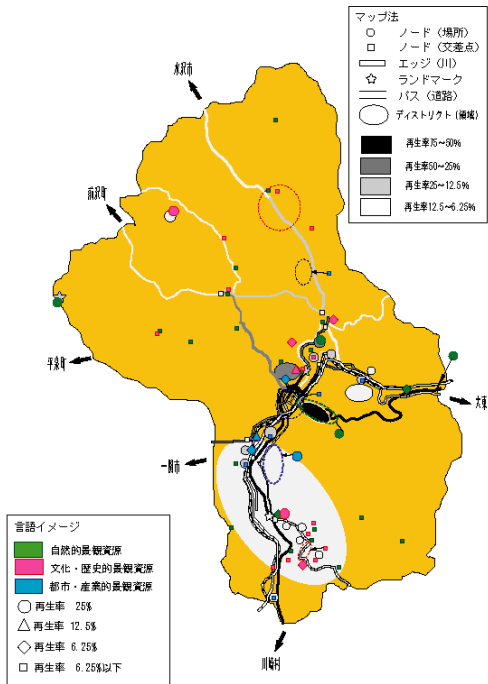


図-4 イメージ調査

5-2.構造論的段階

前段階で検出された東山町の風土イメージより、地域の特性を活かした骨格構造を略画的に決定していく。その結果、東山町において景観的に重要なエリアを6つに分けることが出来た。ここでは、その一つである東山町長坂地区を例として取り上げる。このエリアのデザインテーマは、地域に残る地域遺産を見直し、発見し、保全・育成・展示をすることで新たな観光資源を造って行くこと、及び地場産業の芸術化を図り、付加価値を加えるという考えから、「地場産業の芸術化と地域資源の活用」とした。

5-3.機能論的段階

地域の特性と前述のデザインテーマを基調として、東山町長坂地区を機能的にデザインしていく。ここでの目標は個性豊かな地域社会の形成であり、コミュニティ・アクティープランが課題となる。東山町長坂地区は名勝狛鼻溪を有する地区であり、年間20万人以上の観光客が来訪する。しかし、ピーク時には駐車場の不足が問題となる他、観光客が快適に観光を楽しむための施設、憩いの場がない。このことから、この地区には「道の駅」の構想を取り入れることが有効な手段であると考えられる。この道の駅には、「エコミュージアム」の理念や、JR 狛鼻溪駅も取り入れた新しい形の道の駅のスタイルを提案していく。

5-4.実体論的段階

これらの段階を経て、東山町長坂地区における「道の駅」の構想を具体的に形としてデザインをする。道の駅の施設配置や駐車場などを芸術的にデザインし、パースとして形にする。

6.実現化に向けた景観法による提案

デザインモデルにより確立された東山町の新しいまちを実現化するにあたり、景観法による法的な整備を検討・提案を試みる。

岩手県一関市は、平成17年度に景観行政団体として位置づけられた。よって、東山町を景観計画区域として指定をすることが出来る。講演時には、景観計画、景観重要公共施設、景観地区の選定などより具体的内容を提案する予定である。

【引用文献】

- 1)安藤昭：都市景観の構成，土木工学ハンドブック P841，土木学会編，1989
- 2)水出佳奈・安藤昭・南正昭・赤谷隆一：感覚統合理論による都市景観設計の体系化に関する研究（そのⅡ），第3回観光まちづくり学会研究発表会論文集,pp3-1 - 3-5，2004